

NPO 法人 長崎史談会



長崎学レポート

2021年度 テーマ「長崎の年中行事」 第3回公開講座 2021年7月17日・第4回公開講座 2021年10月17日

第8号

2022年1月1日発行

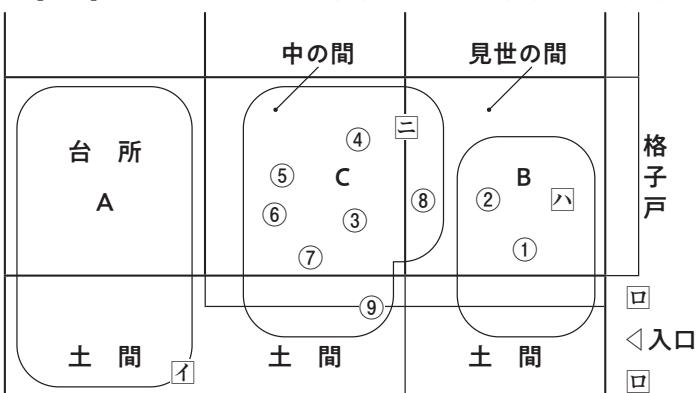
長崎学レポート
編集委員会

〒850-0861
長崎市江戸町5-8
第5ノ瀬中央橋ビル

【表】年中行事と町屋の使われ方
(野口文龍『長崎歳時記』、川原慶賀の絵より作成)

旧暦	行 事	通筋	町筋	表口	一 階			二階	内庭
12/22~28	餅つき、柱餅				土間	台所			
12/28~1/6	門松、正月飾り、年始挨拶			表口	土間	見世	仏間	座敷	
1/1	神棚、恵方棚等に燈火				土間	中間	仏間	座敷	
1/3~9	踏絵				土間	中間			
立春の前日	節分				土間	各間	仏間	座敷	
3/1~3	雛飾り						座敷		内庭
5/1~5	端午の節句			表口				2階	
7/6夜	七夕			表口				2階	
7/13~16	精霊飾り、門燈籠			表口			仏間		
9/1夜	庭おろし			表口				座敷	内庭
9/9、11	くんち前日、後日			表口		見世		2階	

【図1】町屋における餅つき（A）、年始挨拶（B）、踏絵（C）



『長崎歳時記』(野口文龍、寛政九年)と川原慶賀の絵から、江戸期の年中行事について表にまとめた。長崎町屋の使われ方について表にまとめた。

江戸期の通り筋では、祭礼見戸伝を統一的建築と言える。町屋は長崎の伝統的な建築物のため建て方が工夫され、一般的に一階、二階、外堀まで町屋の格子戸が開けられるよう造られた。ここでは、年末年始の行事をとりあげ、町屋の使われ方をみてみる。

正月準備のため、町屋や遊女屋では、土間で餅をつき、台所で餅が練られた(以下、図1)。遊女屋では、土間で使用人が餅をつき、それに接する台所や広間で、遊女が総出で餅を練つた。町屋では、土間にある竈で米を蒸し、白と杵で餅をつき、ついで米を蒸し、白と杵で餅を練つた。この竈の上に台所で練つた。この餅を台で示す三つ重ねの大鏡に台で飾つた。

第三回長崎学公開講座 第一部発表要旨

年中行事と長崎町屋

村田 明久

一二月二二日～二八日・
正月準備のため、町屋や遊女屋では、土間で餅をつき、台所で餅が練られた(以下、図1)。

◎ 小野原本店

森谷商会

高野屋

松翁軒

福砂屋

みくわ

文明堂総本店

十八親和銀行

メモリード

浜屋

ついた餅で大黒柱に宝袋をかける長崎独特の「柱餅」が慶賀の絵に見える。町屋の大黒柱は、平入り屋根を二分すると所に、餅を焼く囲炉裏が描かれ、当時、火種はコンパクトに移動させ煮炊きできた。

そして、神棚、荒神棚、恵方棚、仏前、その他座敷などに鏡餅を供えた。鏡餅は上に昆布、橙等を置く。とりわけ荒神棚の大鏡は家々すべて三つ重ねとし、上に海老、橙、昆布、串柿、包米、塩、下に杠葉、裏白を敷く。

一月元旦·年始挨拶

人物は原田博二氏の教示

第四回長崎学公開講座 第一部発表要旨

赤瀬
浩

年中行事

わせた主題のもと同じ月
日が巡つてくるたびに繰
り返される行事のこと。
長年の間に形成・改変さ
れ、土地ごとの社会、組
織、信仰、生活のリズム
等を反映し保持されてき
た。年中行事に欠かせな
いものが季節や暦日を示
す「暦」なのである。

本稿では、若干の考察
を加えて暦の種類や特徴
等と長崎の年中行事との
関連について述べたい。

旧暦から新暦へ

権限は古代天子や天皇といふ絶対権力者にしかなく、官曆として定められたことに発する。日本の中年行事も権力者の掌握する曆によつて行われた。明治初めまで使われた旧曆「太陰太陽曆」は「伊勢曆」等の権威ある神社発行のものが御師などによつて全国に流布され庶民にまで広まつた。

この旧曆が今日の行事のもと。現行の行事と本來の季節感がずれたのは暦が太陽暦に変わった時からである。

本稿では、若干の考察を加えて暦の種類や特徴等と長崎の年中行事との関連について述べたい。

「暦」とは、暦は月や太陽の変化をもとに作成されるもので、日を集めて月に、月を集めて一年に編成したもの。大昔から月日を決めないと約束も契約もできないという生活上の必要からつくられたもので、暦の語源を「月(つづく)読み」に倣い「日(か)読み」に求める場合もある。時を司るという大切な

「暦」とは

「暦」とは、暦は月や太陽の変化をもとに作成されるもので、日を集めて月に、月を集めて一年に編成したもの。大昔から月日を決めないと約束も契約もできないという生活上の必要からつくられたもので、暦の語源を「月(つづく)読み」に倣い「日(か)読み」に求める場合もある。時を司るという大切な

「暦」とは
暦は月

「暦」とは、暦は月や太陽の変化をもとに作成されるもので、日を集めて月に、月を集めて一年に編成したもの。大昔から月日を決めないと約束も契約もできないという生活上の必要からつくられたもので、暦の語源を「月(つづく)読み」に倣い「日(か)読み」に求める場合もある。時を司るという大切な

【暦】とほりは月をもとに作る、日を集めて作るもの。大昔めないときないと必要からうで、暦の語

「暦」とは、暦は月や太陽の変化をもとに作成されるもので、日を集めて月に、月を集めて一年に編成したもの。大昔から月日を決めないと約束も契約もできないという生活上の必要からつくられたもので、暦の語源を「月(つづく)読み」に倣い「日(か)読み」に求める場合もある。時を司るという大切な

旧暦と長崎の行事

立たなくなるので、二十四節気を導入し、閏月を挿入することで、季節の変化と行事の整合性をとるよう、工夫したのが旧暦の特徴。年中行事の祭りでは特に農作業と関連したものが多く、太陽暦に移行した後でも大きな季節感は変わらなかつた。

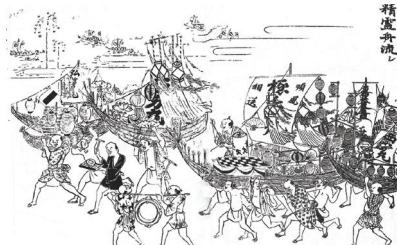


長崎歴史文化博物館収蔵

【図2】川原慶賀「正月図」

一月三日（八日）・踏絵
踏絵は、一町毎に各家々
を廻った。踏絵の様子を
示す慶賀の絵には、似た
構図のものが複数枚ある。

また、「盆」に関していえば夜間の行事であるため、本来の意味とのずれを大きく感じる。盆の七月一日は十五夜の満月。月明かりを照明に



精靈船流し『古今集覽名勝図絵』

事では微妙に季節感がある。例えれば
れるものがある。盆の「精靈流し」。旧暦では
は七月一五日、新暦では
八月一五日。月をずらす
ことで大まかな季節感は
調整できるが、旧暦での
七月は秋。精靈流しは秋
の行事であったものが、
夏休みの真ん中になつて
しまつた。同様に正月は
春の行事が冬に、「ペー
ロン」は夏の行事であつ
たものが春に、「七夕」
も秋の盆に連なる行事で
あつたものが梅雨にと、
本来の季節と行事の関連
の意味が変わつてゐる。

盆の七月一五日は中元の日とも呼ばれる。贈り物が行き交うお中元の語源。もともと上元、中元、下元という暦にのつとつた暦日は、中国大陸発祥。古来から月をあがめる風習の土台に上元、中元、下元という暦日が伝わった。上元は小正月、中元は盆、下元は観月というふうに日本の従来の行事と結びついた。すなわち、月の運行を中心と考えられていた日中共通の行事が、太陽暦のもとで変化し、本来の意味が失われた。

現代の生活では月の光は、かつてのように夜道を照らしたり、人々の暮らしに必要とされたりす

して、提灯の灯りとあわせた灯りのページントが本来の精靈流しであつた。月明かりの下での盆踊り、月と提灯に照られた墓参など電気のなかつた時代は月明かりを借りて、その淡い光の中で、先祖とともに過ごし、送るのである。このことが盆の季節感であった。繊細な季節感の中に、夜間の月の輝きが大きな要素だったのである。

盆と正月

「長崎歳時記」に記載されていいる行事で、過半を占めるのが、正月行事。「若水取り」から始まり、「踏絵」「七日正月」「小正月」「鬼の骨」「節分」(現在二月)「西国巡礼出立」「二十日恵美酒」加えて、「チャーンメラ吹き」、「俵子売り」などの風俗が彩る。まさにハレの行事が正月に集中している。

また、七月は盆を中心とした先祖供養の諸行事が目白押しで、「施餓鬼会」も加わる。特に「精靈流し」に至つては、準備から本番までが一連の行事となつていて、正月、盆どちらも先祖の魂祭りとして夜間に御魂(正月は年魂)が帰宅するという前提である。鏡餅や精靈棚などの依代が家族と先祖を繋いでいる。「盆と正月が一緒に来る」という例えは年に二回ある相似した魂祭りの賑やかさ来形容する。

長崎らしい行事

長崎の行事でもつと異彩を放つのが、唐人屋敷と出島、外国人の行事であろう。唐人については『清俗紀聞』に見るよに、日本と共に通した行事が多く、そのまま伝わつたり、形や主旨を変えたりして長崎の行事や風習として定着した。

オランダ人の行事についてはオランダ冬至、オランダ正月などと呼び、太陽暦をもとにしたオランダ人の生活の中のイベントとして許容し、意識の高い通詞や学者が模倣することで、学問に寄りそいうイベントとして広まつた。

このように暦に沿つた長崎の年中行事は自然の摂理や海外交流の中で定着し発展したものである。



西国巡礼出立『長崎名勝図絵』

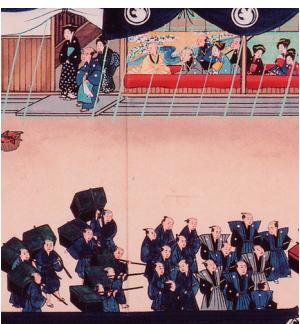
第三回長崎学公開講座 第二部発表要旨

江戸時代の町
(2) 当人町

原田 博二

町があつた。年番町はなく、当人町について、文政六年（一八二三）の『惣町明細諸雜記』（長崎歴史文化博物館収藏）にも「右祭禮中惣町之内八町宛當人町と唱へ年々順番有之九月朔日ヨリ本社并御旅所エ町役人相詰諸事取計申候」とあるように、くんちの間、諏訪神社と御旅所に詰め奉仕をすることでは、年番町と同様である。

しかし、当人町が年番町と違うのは、毎年八か町ずつだつたこと、さらには現在のように「踊町を済ませて四年後に年番町を済ませて三年後に踊町」のローテーションにはならないことである。というのは、例えば寛政九年（一七九七）の桶屋町乙名藤家の『日記』（長崎歴史文化博物館収藏）によれば、この年の当人



お上りに供奉する当人町乙名(祚)

町は、今籠町、諏訪町、
炉粕町、西上町、大黒町、
新町、桶屋町、今紺屋町
の八か町であつた。
ちなみにこの寛政九年
の当人町を、わかりやす
いように現在の踊町の
ローテーションに当ては
めてみると、今紺屋町、
大黒町、炉粕町が北斗
会、桶屋町が神清会、新
町（興善町）が七和会、諏
訪町が常磐会、今籠町、西
上町（上町）が清明会とて
んでバラバラ、これは文
政一〇年も同様である。
これでは、当人町がま
とまって、年番町のよう
にお下りお上りを取り仕
切ることなどできるはず
もない。

このようなことから當
人町は、年番町と違つてそ
の役割はかなり限定期的だつ
たと思われるるのである。

第四回長崎学公開講座 第二部発表要旨

本踊 近代の長崎くんち（2）

大田由紀

明治から大正時代までの本踊は、江戸時代を踏襲し、踊馬場に所作台を持ち込み、書割を立て、簡易の舞台を作つて歌舞伎のさわりなどが演じられた。演目は前日、後日で異なり、立方（踊子）は三人が多い多かつた。早替りや引抜き、セリ上げなどもあり、見物人の喝采を浴びた。

しかしながら昭和になると、大道具は省略され、背景は布に描いた幕になり、ついに舞台は踊馬場から姿を消した。

明治中期から昭和初期

門の宙吊りで観客を驚かせた麹屋町の「浜真砂誉仙石」などは後々まで語り草になつた。明治三三年（一九〇〇）のくんちでは八カ町が本踊を奉納しているが、そのうち六カ町を中村福栄が請負つてゐる。当時、前日と後日は異なる演目であるから、一二の演目の振付と指導をしたことになる。

長崎での歌舞伎興行は多く、評判になつた演目や演出はすぐにくんちで披露された。その面白みは、観客が歌舞伎を知つていればこそ楽しめたものであり、見巧者が育つたのが、くんちの本踊であつたのかもしれない。



大正11年の絵葉書(堀田武弘氏蔵)

森谷商会は、昭和二年（一九四八）創業以来、様々な建設機械や資材を扱う総合商社として、離島を含む県内一四ヶ所と天草に事業所を展開し、年間一〇〇億企業へと登録してきました。「販売」、「リース・レンタル」、「修理」の三本柱を中心、国の強制化政策・防災・減災の役割を担い、安心安全を願つてきました。「販売」は、多彩なニーズに応え、事業の省力化・高度化・システム化を考慮した迅速なサポートを提供します。

現在、社会は新型コロナウイルス感染という思いもよらない試練の真只中 있습니다。人々は真の豊かさや幸福とは何かを問うています。

森谷商会は、時代の波に惑わされることなく、企業も時代に適応し再構築が必要ではないかと考えてきました。

機械設備の提供だけではなく、自然環境・都市環境・生活環境を考慮した上で、人々の心までもサポートする住みよし、満足度の高い「まちづくり」の為のお手伝いをしたいと願っています。



木村・東長崎支店

求し、地球環境を考慮した（脱炭素）サポートを提供します。



取扱商品の重機